

湘南オープンウォーター 2012

『2.5 キロの部出場』

8月26日

高波のため大会は中止。

数日前から台風情報がテレビに流れていた。この台風は沖縄地方に向かってゆっくり接近。

今までに経験した事がないような強い風を伴って 500 キロを強風域に巻き込みながらゆっくり進んでいる。

最大風速は70メートルが予想されている。昔、石原裕次郎の映画で「嵐を呼ぶ男」という題名の作品でドラムを叩きながら『風速40メートルだ!』と叫んでいるシーンがある。ものすごい風で立ってられない風のようなのである。映画の記憶は全然ないので、見てないのかもしれないが看板に記憶がある。すさまじい風である。

それなのに今度の台風は『風速70メートル』それはすごい。半径500キロが強風域というのも豪快だ。気づいたら誰もいなくなっていた感じである。

沖縄地方に接近だからといって安心は出来ない。茅ヶ崎の海にもしっかりと高波が押し寄せていた。

「この日を待っていたんだよな～」とサーファー達が仕事もそこそこ放り出し、海に海にと、打ち寄せる波のようにどんどん押し寄せ、海一面サーファーが並ぶ。波もすごいがその数もすごい。

今日は湘南オープンウォーター大会前日である。そして私は今日も泳ぐ。

波にも高ぶる気持ちがあるのかもしれない。大きな波がドーンと崩れ落ちる。それとも日本を取り巻く諸外国が、国境問題を契機として、線香花火の先ちょに点火するのを皮切りに次々に大玉の花火へと引火。世界大戦への火種にぐいっと近づき、今まさに何かが始まろうとする予感。

そんな興奮高まるサーファー達のボードにぶつけられ、おでこにコブをもらわないように。さらには次々襲ってくる大波、小波、大大波をかいくぐり、ひたすら沖に向かう。

サーファー達を後にして10分も沖に向かって泳いでいくと、そこは大きなうねりのまっただ中。赤ちゃんのブランコのような波がゆっくり上下にふわり、ふわり。予守唄でも

聞くような世界である。

泳ぎの苦手な人にとっては地獄の一丁目から、三丁目を行ったり来たりを繰り返し、もてあそばれている感じなのかもしれない。

波の上の方に出ると「閻魔大王様こんにちは」波の下の方に入ると「閻魔大王様どうぞお許しを！」こんな繰り返しの連続かもしれない。

江ノ島に方向を変えると今度は波と平行に泳ぐ事になる。だからといって泳ぎやすくなる訳ではない。泳ぎながら宇宙遊泳をくり返す気分である。時に泳ぎのバランスを崩す事もあるが、まあ概ね問題はないだろう。明日の大会はこんな感じが続くのかな。楽しみだ。

今日は試合前日。あまり無理も出来ないので大会に備え30分ぐらいの泳ぎにしておこう。どうせトップでゴールになるに違いないのだから。

こうした大きな波の場合、岸に近づくにつれ、波が身体をぐいぐい後ろから押してくれる感じがする。ボデーサーフィン状態で気持ちがいい。さらに岸に近づくと、いよいよ波がくずれはじめ、身体が一気に岸に向かって飛び込む感じである。後ろからくる波を見ながら一気に泳ぎのピッチを上げる。ビューンとスピードが乗るその瞬間、おお快感！そして波は私を追い越し先に進む。つづいて次の波を後方で感じながら波に乗っかる感じでビューンビューン。

波打ち際まで来ても不用意に立ち上がっては行けない。波に足をすくわれる。このところは人生とほぼ同じである。

後ろから襲いかかってくる波をしっかりと見つめ波が来た時、おもいつきってウサギちゃんのように一気にジャンプと前に躍り出る。そして次の波に乗っかってもう一回。その後急いで次の波に足をすくわれないように砂浜に躍り出る。

遠くから私を見つめる多くの視線を感じるのだが、うまくいっても誰も拍手喝采などはしない。そのクールさがいい。本当は誰も見てないのかもしれないが。

ぬれた身体で家に向かう。仕事が待っているのだ。

仕事がないのもつらいものだが、ありすぎるというのも困ったものだ。

サラリーマン生活から、インテリアの自営業の仕事に変わって、はや5年。オリジナル商品を考えるたびに注文が入るのでどんどん忙しくなる。ゆっくり泳いでられない。

才能というものはほどほどが良いものだ。「神様、もうこれ以上私に才能を与えないでください。」

「昔、お金がなくても良いから才能をちょっと下さいとお願いしましたが、もう充分です。もう結構です。勝手なお願いですがよろしくお願いします。」

こんなに練習をを重ねて走ったり、泳いだりしているのに、まだオリンピックにも出られない私です。

次はリオデジャネイロ。これからまた4年頑張るのは少しつらいのです。

結局今年のスイミング大会は高波のため中止になってしまった。

会場まで足を運んで海を眺めてみたが、沖へ出るのに少々問題があるが沖に出てからは問題はないようだ。しかし私の「湘南オープンウォーター2012」は新記録を見ることもないまま終わった。

大会が終わっても修行はつづく。毎日海に向かい1時間のスイミングをこなす。

大会から1週間後の日曜日の午後。いつものように海をぐるりと一周のつもりが、この日に限ってやたらクラゲが多い。ぶつぶつ身体にぶつかってくるし、ぶつぶつ、ぬるりで気持ちが悪い。水クラゲのようだ。さされる感じはないが気持ちが悪いので30分程泳いでいたが、もう我慢が出来ないので修行を取りやめ岸に向かう。

修行というものは気持ちよくやらないと長続きしないので、嫌な気持ちのときはすぱっと取りやめるのが良いのだ。そんな訳だから戻りは全速力で泳ぐ。

サメに追われて逃げているのかと見まごうほどにいそぐ。泳ぐというより飛ぶ感じである。

岸にたどり着いて、おおいやだ、クラゲにぬるぬる触られた身体にTシャツ、サーフパンツをさっと着て、さあ帰ろう。

そんな私の近くで子供二人を波打ち際で遊ばせ、それを浜から見ているお父さんがいる。通り過ぎる時「こんにちは」「いつも泳いでいるんですか」と声をかけられ。「毎日泳いでいますよ。今日はクラゲが多いですよ。先日は湘南オープンウォーター大会中止になってしまいましたね」などと会話を交わすうち、彼が、私も「大島から茅ヶ崎まで泳ぎました」と言うではないか。

え！先日そんなスイマーがいたことを聞いたばかりだ。

大島から茅ヶ崎まで泳ぐって、およそ普通じゃない事だ。ドーバー海峡を泳いで渡るとどっちが大変かと論争するようなレベルだ。

私の無茶ぶりとは相当次元が違う無茶ぶりである。最初に思った感想は、大島から泳ぐとすれば常識的には一番近い熱海に向かうのが自然だろうと思ったものだ。イギリスからフランスへ向かって泳ぐ。これが冒険者としてふつうの発想なのである。

もちろん遭難している訳ではないから、どこへ向かって泳ごうと自由なのだが。距離にして2倍以上は遠くなるだろうし、冒険としても少し遠すぎるだろう。

遠泳というものは陸地から島へ。島から大陸へ向かう。これが動物的本能だからである。わざわざ湾内深く入り込んでくるのは迷ったクジラか、イルカさんぐらいのものだ。

次の素朴な疑問は、自分の泳いでいる位置をどうして知るかということだ。

いつも泳いでいて一番重要な事。それは現在自分がどこを泳いでいるかという事だ。

プールではないのでコースラインがない。風で流されているのが把握できない。泳いでいるときは潮の流れが読みにくい。うねりが高くなってくると海からはっきり分かる目標物がほとんど確認できない。荒れ狂った海の状況では、まっすぐ泳ぐこともままならない。

風が強まり白波がばんばん襲いかかってくると泳いでいる事だけで精一杯。周りを確認する余裕もなくなる。完全に太平洋独りぼっちだ。

彼の冒険には伴走のアウトリガー船がついているというので納得。なるほど。なるほど。

私が沖合を1時間かけてぐるり一周。約2キロ。これを毎日していると言えば、彼は江戸島までの往復10キロを泳いでいるという。素晴らしい。

さらに2月から泳いでいるそうだ。2月と言えば私の一番つらいときだ。寒いのでストーブの前から離れられない。ただひたすら3月が来るのを布団をかぶりながら待っている。一年で一番つらい季節。それが2月だ。

例えて言えば私にとって2月は冬眠生活の月である。

毎年1月には北海道に向かう。四人の孫たちにスケートを教えに帯広に行くのだが、小学校のグラウンドはスケート場に変身している。それもスケートリンクが3個も作られている。隣のリンクでは少年達がアイスホッケーをしている。

北海道の冬はいい。部屋の中が暖かいのだからシャツ一枚でもいい。外に出るときは完全防寒着だから氷の世界でも全然寒くない。平気。快適。

それに比べ茅ヶ崎の私の部屋はなんて寒いんだ。足が冷たい。

2月に泳ぐなんて自殺行為でしかない。しかも彼はウエットスーツを着ないで海水パンツ一枚だと言う。本当だろうか。にわかに信じがたい。やっぱり嘘に違いない。

お互いにオープンウォーターの醍醐味や冒険の体験談を語り、意気投合した我らは名前を紹介し合い握手をかわし、またいつかということで別れた。

名前を聞いたのでパソコンで検索。最近は何でも一瞬ですべてが解明されるから怖い。

『鈴木一也』あった。あった。これはすごいやテレビでも紹介されているようだ。

大島〜茅ヶ崎までの遠泳に挑戦。30分に一度、水の補給。1時間に一度、食事を取っているそうだ。ずいぶんこまめに食事を取るものだ。テレビで放映された映像を見てると隣をサメと一緒に泳いでいるじゃないの！。サメを手なずけたのか？サメの背中に乗っ

かって泳いでいる訳ではないようだ。恐ろしい映像だ。伴走しているクルー達の慌てた叫びが恐怖を増大させる。約60キロを22時間かけて泳いだそうだ。もう三回も挑戦しているようだ。

こんなにすごい猛者が我が家の近くに引っ越してきているとは驚きだ。私の生まれたところは、畑の真ん中で、果てしなく畑がつづくところだった。海も山もない。高校生になるまで泳げない。茅ヶ崎に引っ越しをして30年。海との生活が始まる。

この間に松林が住宅に変わり、海の好きな人々がどんどん引っ越してきた。新しい住宅には大きな表札のようにサーフボードが立てかけられている。あれから人口は5倍は増えてるに違いない。そして今、サーファー達だけではなく、海の鉄人達も混じり始めているようだ。

それにしても「大島〜茅ヶ崎間を泳ぐスイマー鈴木一也」は激しすぎる。

マラソンで42.195キロは、私には長過ぎるので通常10キロの大会に出ている。

42.195キロは走る距離じゃない。そんなに遠いところは自動車とか、バイクの走るのが気持ちいい。戻ってくるのも楽しだし、行くのも早いから。

彼はオリンピック選手並みのスピードで泳いでいるに違いない。私の場合オリンピック選手の倍の時間を使って泳いだり、走っている計算になるので、60キロを泳ぐには44時間が必要になるだろう。遅いということはそれだけ長く身体を使うことになるので、疲労はさらに大きくなる。

もし私が挑戦する事になったとすれば、30分に一度、水の補給。1時間に一度の食事は当たり前。おやつの時間とか、コーヒータイムなんかあったら楽しいな。4時間ほど泳ぎ続けた後は、軽くていいから睡眠も取りたい。海面で浮いているのも面倒だから永遠の眠りでも良いかもしれない。

やはり他人には言えない自分にあった泳ぎというものがあるからな〜

今日も忙しい中、時間を割いて1時間のスイミングに出かけた。戻ってすぐにコーヒータイムだ。私の生活にコーヒーは欠かせない。

いつもコーヒーでお世話になっている渋谷先生がおられる。コーヒーにかけるこだわりがすごい。生豆コーヒーを購入し、ご自分で豆を炒る。手でゴリゴリコーヒー豆を引きゆっくりとお湯を注ぐ。せっかちな私は見ているだけで少々じれてくるが、その味は絶品である、

何か事あるごとに、コーヒーをごちそうになるが、毎回手ぶらでお伺いして、お土産まで頂くという失礼をしているのだからやめられない。

以前茅ヶ崎高校に出張の必要があり当時校長だった波井氏にコーヒーをごちそうになると校長室を訪ねたが不在で、教頭先生からお茶をいただき帰ったことがある。「お茶を濁す」とはこういうことなのだろう。

我が家の斜め前の家に「とくさん」「1093」（生ゴミのバケツにもとくさんを数字で表示されておられる）という鉄人が住んでおられる。

まだ70歳を過ぎたところだが、サイクリング自転車を蹴って走り回っておられる。いまだオリンピックに出られないと悶々と修行に励んでおられる姿がうつくしい。

「とくさん」は毎年アドリア海に一ヶ月ほどお出かけになり、オリンピックに向けしっかり泳いでおられるようだ。アドリア海の水は北方に位置するにも関わらず暖かいそうで毎回戻ってきては「アドリア海は最高ですよ」と報告をうけている。聞いているだけでも涎がでそうで、悔しい思いをするのである。

私は今日も茅ヶ崎の海でクラゲをぬるぬる、かきわけ、かきわけ、時々ちくりと刺され、イテツといいながら泳いでいる。それでも私は茅ヶ崎の海が好きだ。

この「とくさん」もまたコーヒー通なので、我が家でコーヒーをお出しする時には緊張をしなければならない。「先きごろ、世界遺産となったコロンビアコーヒーを購入しました。コーヒー園の管理方法などが評価され、素晴らしいコーヒーが生まれたそうです」などと講釈などをしてからお出しする訳である。

他人には言いたくないが、私のコーヒータイムの場合は豆を挽くのも、入れるのも電動でウィーニー発である。簡単です。

とくさん邸にお邪魔した時、当然コーヒーを入れて頂く事になるのだが、台所の方に耳を傾ければ、手挽きのコーヒーミルでこりこり豆を挽いておられる。

コーヒーにこだわりを持つ男達が私の周りに多いが、こだわりを持った方々はコーヒーの味に限っている訳ではなく、その生き方にこだわりがあり、人生にひと味もふた味も深みを持たせ、味わい深く魅力ある生活を送られているような気がする。

こうしてみると、コーヒーの深い味わいは、青く深いマリンブルーの海にも似ているような気がしてならない。

仕事に疲れ果て、コーヒーを入れる元気もない私に、「妻が、私で良かったらコーヒーを入れましょうか？」といったことがある。全く分かっていない。丁寧にお断りをしたことがあった。

2011湘南オープンウォーター大会は泳ぐことなく終わってしまったが、私の泳ぎはつづく。昨年は11月初めのお天気の良い日まで泳いでいて、浜の散歩の方から寒くない

ですか？と奇異な目で見られてしまった。

次の大会は2013年1月27日「湘南藤沢市民マラソン（10マイルレース）」に戦いの場を移す。この大会の問題は制限タイムが1時間45分と早いことだ。途中うまいものがあってもゆっくり食べていけない。

今度こそ金メダルをゲットして世界をアッ！と驚かせてみたいものである。